

まちの話題

▶私の住む東近江市にある徳昌寺に、大地の再生をされている庭師さんが来た。手伝いができるかと聞いて一緒に作業を▶途中、ふと、思い出す。雨が降るたび、深い所では15cm程の水たまりが広がる自宅の庭の光景を。地図を見ながら話を聞いているうち、この辺一帯の水脈が山から私の住む地を通り、琵琶湖に向かって流れていることがイメージできた!その瞬間、閃いたようにうれしい気持ちに。水が滞るのは水脈が遮断されているから▶水たまりの水をすくいへドロも取り、石を転がすように入れて、炭をまき、その上から土や葉を被せる。その上を歩くと、フカフカ♪地面の上に水脈ができると、中の方でも水脈ができる。そして水脈を通った上に建つ家も人も元気になる。木と同じだ▶矢野さんの仕事は、手作業であっても機械であってもそれは水や風の仕業のよう▶そんな風にされたら木もうれしいだろうなと思ながら家に帰ると、0歳児のおシメを替える手の動きが、柔らかくなっていた。「そうよね、この子も、自然そのものだもんね」▶最近、日本の社会情勢は、子どもの未来を思うと不安になることばかり。でも、徐々に明るい未来のイメージが湧いた!私にもできることがある。結局、赤子を背負いながら、8日間、徳昌寺に通った。(やすこ)

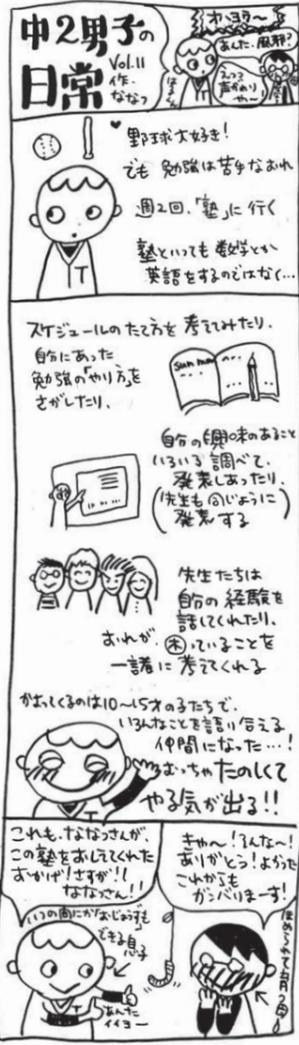
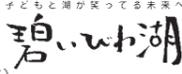
びわこおっぱい塾info

おっぱい塾は、母乳育児を望む母親たちが集う安心スペースとして、2004年から始まり、現在滋賀県内の9カ所で開催されています。どうぞ気軽に遊びに来てね~!

総合案内ブログ「びわこおっぱい塾」
<http://biwakooppaijuku.blog70.fc2.com/>
 <東近江キラキラおっぱい塾より>

八日市のぐるりの家にて、毎月第2木曜10時~11時半開催。お弁当もゆっくり食べられます。おっぱいのこと、ミルクのこと、子育てのこと、家族のこと。などなど…ワイワイおしゃべりしながらいろんな思いを共有しませんか?たよりになる助産師さんとちよっぴり先輩ママが待ってま〜す!!気軽に遊びにきてね!

あまいろだより(天色便り)
 あまいろ探偵団、走る!手づくり市民メディア
 第22号 特集:生まれることと、死んでいくこと
 発行日/2015年3月15日
 編集/あまいろ探偵団
 (綾牧生・岸田知之・北岡七夏・きむきかん・中野和子・藤井朋子)
 発行/特定非営利活動法人碧いびわ湖
 ~大切なことを他人任せにしない。
 自分たちで力をあわせてつくる~
 〒521-1311滋賀県近江八幡市安土町下豊浦3番地
 TEL 0748-46-4551 FAX 0748-46-4550
 info@aobiwako.org http://aobiwako.shiga-saku.net/



あまいろだより



天色便り
 あまいろ探偵団、走る!
 手づくり市民メディア
 第22号 2015.3.15

生まれることと、死んでいくこと

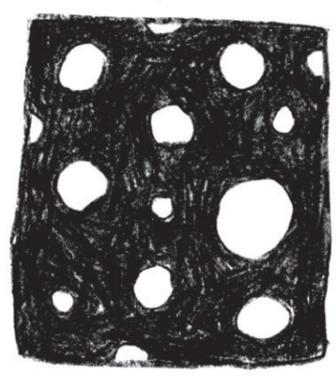
子育て広場、やっています♪
 ~子どもの野外遊び×親のおしゃべり~
 *毎月第2・4月曜日
 *守山の目田川or栗東のたまてばやしにて
 基本第2月曜はたまてばやしにて、第4月曜は目田川にて行います。但し、天候や諸事情により変更になることがありますので、碧いびわ湖のブログにてご確認ください。か、お問合せください。
 表紙タイトル/岸田知之
 *kikito びわ湖の森を元気にするkikitoペーパーを
 biwako-no-mori 使用しています(びわ湖の森の間伐材活用)

暮らしのコラム

最期を生きる
 藤井朋子
 は確かにそう語っていた。
 「ええんよ。楽にしてね」と肩をなでる。少しでも温もりが伝わるようにじっと手をあてる。Aさんはまた重そうに瞼を閉じた。
 “なんて美しいんだろう”
 その柔らかで穏やかな横顔に、しばし見とれていた。私にとっては、初めて立ち会う自宅での自然な最期だった。
 それはただただ美しかった。
 身体には管1つつながっていない。痛々しい点滴の跡もない。水分もとれないので身体は脱水に傾き、余計な浮腫もなく、痰が呼吸を遮ることもない。
 住み慣れた部屋には、息子さんが母を思い焚きつけるストーブの音と、とくん…とくん…すう…ふう…その静かな音とリズムがあるだけ。
 最期の力で感謝を伝えてくださった。それは 歯科医師の父をもつAさんの、律儀で折り目正しい性格をよく映していた。最期までAさんらしくかった。
 何者にも蹂躪されない生命の尊厳がそこにはあった。
 その半日後、代わる代わる訪れた3人の息子さん皆に挨拶をすませ、Aさんは息をひきとった。
 様々な生があるように、様々な最期の時がある。
 穏やかで苦痛のない最期を望みながらも、病があればそうもいかないことも多い。自然な最期を望む方もあれば、最期まで

とくん…とくん…すう…ふう…
 脈拍30 血圧60の30 体温34.2度 意識も遠のいている。
 95年を生き抜いたその方は ゆっくりゆっくりとその生を終えようとしていた。数日前往診した医師に、「もう最期が近いかもしれない」と告げられた息子さんは、「家で看取ります」と心を決めていた。延命も医療処置も何もせず、自然のままにと。
 となると、医療者ができることはあまりない。ただ楽に最期の時を過ごせるよう、最低限のケアをし、家族の語るストーリーに耳を傾けながら、静かに寄り添うだけだ。
 Aさんは1ヶ月前まで、身の回りのことは全て自分でやってきた。ヘルパーさんの手を借りて美容院にも出かけ、お金の管理も自分でされてきた。それがトイレに行くにも難儀するようになり、私は訪問看護師としてAさんに関わり始めた。重ねた布団に埋もれながら、「あなたは何をしてくれるの?」と問う声に、Aさんの芯の強さを感じたものだ。
 赤く目をうるませた息子さんと2人、はだけた寝衣を整え、おむつを替え、シーツの汚れを払い、体勢を整える。体温を失いかけた身体に冷気を感じさせぬよう、手早く、優しく。整え終えて声をかける。
 「終わりましたよ。ごめんね、しんどかったね。」
 すると遠く意識に抗うように目をあけ、頭をもちあげべこりと一礼してくださった。「ありがとう」声は出ないが、その目と表情

闘いたい方もある。
 当人を取り囲む人の様々な思いが、最期のあり様を左右してしまうことも多い。
 それでも、最期までその方らしく生きられることの大切さをAさんは教えてくれた。
 新たな生命芽吹く春に、逝きし生命を思う。この循環の中では、どんな生命も美しい。



 藤井朋子…あまいろ探偵団。2人の男子の母であり、看護師。最近古い家に移り住み、納屋にある古いもの(アンティークともいう)をどうしようか悩み中。

こんな本、いかがですか?
 『いのちを産む—お産の現場から未来を探る』(文/大野明子、写真/宮崎雅子)
 大野明子さんは産婦人科医。自身の体験から、「自然なお産と母乳育児をお世話する」診療所を開院。この本は、そこでお産をされた家族の写真が、実にたくさん掲載されています。モノクロームの写真は、どれも親密なあたたかさ、命を生み出す現場というピンとした緊張感が伝わってきます。しかし、妊娠から出産までを通した女性の姿って、なんて美しいんでしょう。この本を開くたびに、命を生み出す性の、はかりしれない強さを感じます。
 さらに本書は、産科医療にまつわる様々な問題(産科医不足、助産師不足etc)についても多くのページが割かれていて、その現状に溜め息がでるばかり。現代社会が抱える問題そのものです。そこで大野さんが出す答えは「すこやかに生きる」。うーん、「すこやか」って、いい言葉。あらためてココロに留めて、日々を過ごしたい。「今日もすこやか、ありがとう」(綾牧生)

蟻の牙
 自分を変えることなら出来る
 誰かのせいではなく、現代の暮らしは、被害者であると同時に加害者でもあるのです。だから、自分の暮らしを変えましょう。そして持続可能な暮らし、地域を作りましょう。
 福井富久子
 ありませんか? 生活の中の、これだけは…というこだわり。小さいことだけど、私一人やっただけで仕方ないかもしれないけれど、でもやっぱりこれだけはゆずれない…というこだわり。小さいけれど、痛く突き刺す、「蟻の牙」のようなこだわりを紹介しします。

今回、あまいる探偵団は妻や夫も一緒に開業助産師の朝比奈順子さんに会いに行きました。朝比奈さんは東京で病院勤務後、助産婦学校の教員をされた後、東近江市で「朝比奈助産院」を開院。現在は夫の緑町診療所の一床として助産婦による自然出産をされています。

(あまいる探偵団/綾牧生・亨夫婦、岸田知之・明子夫婦、藤井朋子、中野和子、きむきがん、北岡七夏)

藤井朋子(以下朋) / 私は訪問看護の仕事をしてるんですけど、病院での積極的な治療はせず「おうちでの最期まで過ごすサポート」という方もいて。ただやっぱり最期まで過ごせるってまだまだ少なくなくて。先日、私にとっては初めておうちで何もせず自然な最期の看取りに立ち会わせてもらうことができて、すごく感動して、すごく美しいなって思っています。(暮らしのコラム)参照

きむきがん(以下き) / 今回は朋子さんの「死と向き合う」ということと同時に「生まれる」ということも向き合っていて、私たちが暮らしの中で忘れかけてることを思い出せるような話し方ができたらしいなって思います。朋/ すごく大きなテーマですけど、皆さんの出産体験や経験の中で感じたこと、自然なお産を見守り続けている朝比奈さんとそんなお話もできたらなと。綾牧生(以下牧) / 朝比奈さんにはうちの三姉妹がお世話になってます。長女は三月生まれで、その年の元旦の新聞に(朝比奈さんが)出てたの。それを見て滋賀にも助産婦さんがいるんだって。その前から本は読んで病院出産に対して疑問はあったんだけど、その新聞記事読んでこれ！って思ってた。電話して、もう八ヶ月目だったから「あんた、それで？」って。だけど「もう行くところないんでしょ」って、リスクの高い私を引き受けてくださった。

朝比奈順子(以下朝) / 初産で貧血があって、結局出血が多かったからね。でも自分とどどん食べて飲んで、点滴だけじゃなくね。でも次のお産は嫌だって言ったんだけど(笑)。三人目までいったのよ。

三人目のお産その直後、私の体がおかしい。座ってるのに体がだんだん左の方へいくな、牧生さんのパジャマのボタンがつながらない、意識はあるけど。夫と病院行ってCT撮ったら右の脳に十円玉くらい出血してた。普通は入院するやん。でも病院で死にたくないって、いつか死ぬんだってたらね。だから帰ってきたんだけど、まだその日はお産があったね。その彼女も二人目だったから「悪いけど産まれるまでこの階段上り下りしてね。今私は体調悪いから違う助産婦だけいい？」って聞いて。夜中の十二時に産まれて、私元気が良かったから二階行って「おめでと、よかったですね」って言って降りてきたの。降りてきたらもうげーげー吐いて頭がんで脳出血の症状が出たの。「これあかんわ、お父さんやっはり病院へ行こう」って行って、集中治療室に入って点滴ばかり二十四時間ね。いつもほら、いつお産かってケータイもってるでしょ。そのときは本当に何もなくて久しぶりによく眠れた。入院してよかったわって(笑)。二日目から八日。三日目に退院してきて、無理矢理。医者言うこと聞いてたらねずーっといないって、もう本当に半身不随になっちゃう。ウオーキングですよ、太郎坊さんを。最初

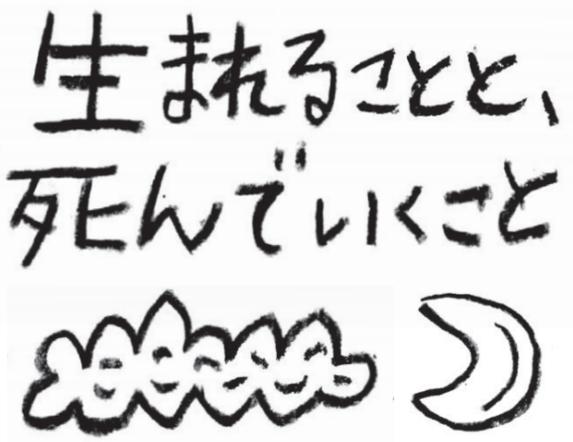
は頂上まで登れなかったけど。五十日経ったら出血がなくなりました。死ぬかもって思ったけど。うちの父が脳出血で死んでるから。死ぬときは死ぬしね。いつもの生活の中で自分がチヨイスするものが必要だよ。病院じゃ嫌だとか、畳の上で産みたいとか、畳の上で死にたいとか。それはいつも自分で持っていていざというとき決断しないといけないもんね。

北岡七夏(以下七) / 私は三人子どもがいて、上の男の子二人は普通の病院で、三人目は家で堀尾さんに。すごくよかったです。家で生んだら死ぬ時のもも考えて、私も家で死ぬことができたらいいなと思うようになりました。生むことと死ぬこととつながってるな。

▼産むときは、死ぬ覚悟する

朝/ みんな自然のお産を体験してるから原点をわかってるんじゃないの？みなさん自身の意見が一番大事だよ。世の中を変えるのは九十九%じゃなくて1%の人たちが変わると思ってるの。けもの道も一匹からってのが、私の一番根底にある。

自宅出産をやった時には本当に少なかった、年間五人ぐらいいいじゃない。自宅産めるんだって、そういうことを世の中知らない人が多過ぎるよ。難しいことでは決まってるんだけど、みんなの頭の「病院に行くもんだ、分娩台に乗るもんだ」っていう刷り込みが結局行動をおかしくさせちゃってる。自然のお産ってのは自然に生きているってこと。で、みんな自然に産んでるんだからさ。いいわね。自分で覚悟してるからね。それがいいとお産なんかできないよ。私は若い頃東京の大病院で仕事しててね。私たちの教育ってのは、病院の助産婦の教育しか受けてないわけ。産婆(開業助産婦)の教育を受けてないんですよ。だから切った張ったお産で本当にろくなお産をしてこなかった。いつもそれが心の傷ですけどね。一晩十人もお産したり、ベルトコンベヤーでするか誰かお産したかわからないくらい。大病院なんかだと無痛分娩だとかで麻酔をじゃんじゃか入れてね。そうすると自分でお産なんかできない。上から押したり、引っ張らないと産まれない。吸引器ですっぽんすっぽん頭を引っ張り、頭が擦り剥けるから湿布するの。新生児室は惨憺たる状況。そういうお産をしてきてその時はあまり感じませんでしたよ。でもある産婦さんが「これは無痛じゃないじゃない！」って言ったのよ。そんな時代を過ぎて産婆の学校の教員になって。その後自分の流産でショックを受けて、登校拒否になって辞めた。それで滋賀県に越えてきて一人子どもを授かりました、四十歳ですけど。畳の上で、あの有名な吉村医院でお産したんですけど。予定日二十日遅れて、でも彼は待ってくれました。出産時、心音悪くなったから帝王切開して吉村医師は言われたけれど、私は長い経験から必ず回復するという信念から「ダイジョブ、先生」って(笑)。そしたら先生、口にチャックで何も言わないで、産まれたんですよ。羊水がドロドロで死



ぬか生きるかだけど、おぎやーと泣いたからこっちもわーって泣いてね。

中野和子(以下和) / 私はカナダにいるときに二番目を妊娠したんだけど、カナダのお産婆さんとこに通ってたのね。向こうはシステムティックになっててちゃんと揃ってていいね。何かあったときにもお産婆さんが手当てをできるわけ。日本に帰ってそういうことができるか、ちゃんと病院があるか確かめなさいねって言われて帰ってきて。聞いたら、「日本の助産師はそういう処置はできない」って言われて。九ヶ月で帰ってきたから、パニック状態。でも、朝比奈さんは「女はね、産むときは死ぬ覚悟しなきゃダメなのよ！」って。何度か何度も言われて。

朝/ あ、そう？(笑)

和/ 「私は死にたくない！」って思ってたけど(笑)朝/ いや、私は自分でそう思ったから。自分のお産のときはね、死装束ですよ。白のネグリジエ着て、もし何かあったら自分で覚悟してたから。自分しかなんだから。

和/ それで私が出産したあと聞いたのは、カナダのお産婆さんで産んだ人たちが結構訴訟が多い。でも、日本のお産婆さんってすごい技術があって、その上で「死ぬ覚悟しなさい」って。朝/ それも技術よね？(笑) 北米では助産婦でもお下縫ったり切ったりすることはできるけど。でもほとんど切らなくて出るんですよ。と/ そう、私もちょっと驚きでした。看護師の友だちとか「ダイジョブなの？安全なの？」って心配して。言われると私も心配になって。先生は統計化したデータをくればって、それを見たときに病院でのお産と数字で見ても異常出産が多いとかそういうこともないし、全然遜色ないっていうのをそれで見せてくればって。実際出産してみても、切らない技術があるんですよ。やってことに驚いて、呼吸の誘導の仕方とかすごくそれは驚きました。けどそれってもしかしたら病院で産むようになって失われてしまった技術。たぶん私の友だちの若い助産師さんとかは知らないんじゃないかな。

七/ 「覚悟」も技術。緊急のときは行き来ができるよ。うな、病院と技術のやり取りが分断されないことが本望は望ましいですね。

朝/ そうね。大病院には緊急な状態のときの技術がある。私が今まで取り上げてきて死んだことはないんですけど、危ないって連れて行ったことはありますよ。き/ 助産師として開業した大きなきっかけは？

朝/ それは吉村医院で自分のお産をしたこと。目からウロコ、こんな簡単にお産できるやんって。なんで今までいっぱい出血だらけで機械もいっぱい使ってたのにそれって。吉村でやってるのは産婆のお産。私はそれで開眼したと思っています。これからは女は自然にできる力を持っているんだってことを、啓蒙して行かなくっちゃいけないなって感じたんです。

で、今度は五十になつたらなんか世の中がおかしい。「男助産婦賛成！」って出てきてね、えー？これなんだらうって。これまで助産師会は反対してたのに賛成に

回って、法案が通りそう。これは大変。病院の助産婦にはあまり関係ないんですけど、男でも女でも関係なく思ってるんですよ。外国には男の助産婦もいるんですよ、でもあちらの女性はノーと言える。日本の女性はノーと言えないから、セクシャルハラスメントが必ずあるし、これは問題だと。そうしたら夫が「一週間東京行ってこい」って。国会ですよ、国会陳情。

▼お産って、自然だったこと

き/ 病院などの箱じゃなくて自宅って、お母さんたちがそれを求めるようになった動機っていうのは何だと思えますか？

朝/ それは「自然復帰」でしょうね。物質的なものじゃなくて心の安定感かな。マーガレット・ミードっていう文化人類学者が、「お産は男の手から女に返さななくちゃいけない」って当時言ってる。

七/ 産むことを選ぶって何かあったときに自分で責任を取ることを心に決めるってことだと思うんです。「死」を考えるともあるし。母親はわりあいそういうことをすんなり決めて、お父さんは？

岸田知之(以下知) / いきなり妻が新聞持ってきて、助産所で産むって言われてどうだったの？

綾亨(以下亨) / この人言いついたら聞かない(笑)知/ うちも言いついたら聞かない(笑)一同/ 笑

亨/ そもそも助産所ってどんなもんなんやろって。行ってみると・・・家なんですよね(笑) あれ？普通の家じゃないか！って。ちゃんと設備がないと危ないんじゃないかとかもありました。ただ、万が一のときは提携の病院に運びますよってあるし。なにより朝比奈さんがね、引き受けるって覚悟を持ってきて、しっかり叱咤激励してくれて。妻に歩けとか運動しろとか言ってくれてるんですよ(笑) 我々に共感を持ってくれているな、って感じなんです。

岸田明子(以下明) / 私は結婚当初から食事を変えてみたり薬や病院に頼らない生活をしていたので、自宅出産みたいなことも聞きつけて。いろいろ調べ始めて助産院を知ったんです。(夫の知之とは) 同じような生活をしてるので、違和感はなかったよ。ね。親は普通に心配して、でも親こそ私が言い出したから聞かないって知ってるから黙って。今日のテーマを聞いて思い出したことがあって。母の母親が亡くなる前にしばらく自宅での介護生活が続いて、だんだん食べる力がなくなって液体のものになっていって、母に「人ってゆっくり育っていくから、ゆっくりに死んでいくんだよ」って言われて、確かに！って。子どもがどんでんできていく、逆をたどるようにならなうって。母はそれをわかっていて。一つでなくなっていく。朝/ 私が「家で産むことが一番いい」って思うようになった動機。実はうちの夫のおばさんが東京で一人暮らしして、末期ガンだったのね。「お父さんおばさん一人暮らしだから見てきたら？」って言うたら、連れて帰ってきちゃった。二ヶ月ぐらいつつ病院に入れて。お風呂に時々帰ってくるんだけど、三回目のとき「おばさん、よかったですら家にいらした。そうしたら私、すごい薬でね、病院だったら毎日通わなくちゃいけないし、看護婦さんに頭下げなくちゃならないし。病院では「苦しい」とか「吐きたい」とか言うのがね、「今日はトマト」「明日はいわし」とかちよつと食べるのよ。食べたらちゃんとうんち

とおしつても出るの。それ見て「すごい、自然だな」って。そうして自然に亡くなったの。ああ、この人は私に「畳の上で死ぬのは自然だよ」って教えるために来たんだなって。家で産むのと家で死ぬのは同じなんだよって彼女から教わった気がします。

き/ 朝比奈さん自身が産まれる前と後で、感覚というか一番違うところはどんなところですか？

朝/ どんなところかなあ。やっぱり「お産って自然だったことかな。それが一番大きいかなあ。あとやっぱり感謝、命って授かるもの。産むっていうことも祈りなさいって言うよ。誰でもいいから祈りなさいって言うのよ。女っていうのはやっぱりそういう力を誰かからいただいて、自分は今ここに居るんだって。そういうことかな。

き/ 八ヶ月で助産師さんになって決めた牧生さんとか、生き方を見直していったら自宅出産が自然かなと思っただ明子さんとか、直感を効かせる人と、いっぱい知り過ぎて病院でないと「危ない」って思ってしまう人たちの違いっていうのはなんやと思われませんか？

朝/ 感性ですね。感じる心。物事に対して喜んで泣いて、そういう感動がないと行動ができない。うちでお産した人たちはみんな本当に生き方がね、すばらしいなって。自分の感性を信じてそれを行動してるんじゃないかなと思う。だからお産によって脱皮をするし、また自分がそこで産まれるし、そしてそこによって子どもを育てることができるよう。最高だと思っただよ。ね。だから私は吉村を選んだことは間違いないや。な。この人と自分で、もし死んでもいいっていうぐらいの信頼があった。だからその信頼関係がないと、お産の場合何もできない。

▼女が社会を変えていく

き/ お話を伺って一番大きいなと思ったのは、「日本の女性はノーと言えない」っていう、日本市民はこまでやられてるのに声をあげないって、ちよつとマイナスな特徴がある。ずつとたくさんのお産に関わり続けて、次の未来につなげるメッセージなんかがあれば。

朝/ そうだね、昔は若かったし物事を考えてなかったから成り行き任せばかりだったんですけど、今は本当にこれからの子どもたちがどうやって生きていくんだらうってすごく思います。澤地久枝さんが「これからの社会はお母さんが変えないといけない」って。もう亡くなった助産婦さんが、「もし男の子産んだらね、戦争になりそうだったら母ちゃんが反対するんだよ」って、そういうふうにならざるを得ないって。私に言ってくれたのを忘れないんですよ。すごく大事なこと。女性として母親として本当に自分の子どもを戦場に送っていいのかわかっていうこと。今みたいな匂いがあったらこっちはさるから。母親が社会を変えていく、女が社会を変えていく、それしかないってことかも。今、物を考えて、女性を考えると、将来や子どもを考えるとすごく忙しい(笑)。いつも頭をくるくる回して、脳出血してる場合じゃない(笑)。しゃべれるだけでもね、ありがたい。私の場合右の脳だったからしゃべれるの。左の脳だったらしゃべれない。

き/ ああ、神様ありがとう。

(本文中、助産師が正式ですが、あえて助産婦にしています)